

幼児期における「生命（いのち）の安全教育」に関する 教諭用指導資料と家庭用教材の開発

鈴木 美優
養護科学コース

1. 研究の視点

文部科学省では、令和3年度から、子どもたちが性暴力の当事者にならないよう、全国の学校や園において「生命（いのち）の安全教育」¹⁾を推進している。性犯罪・性暴力は、被害者の尊厳を著しく踏みにじる行為であり、その心身にわたり、重大な悪影響を及ぼすものである。幼児期においては、性に関する認識が不十分であるため、性暴力の対象になりやすいことや、性犯罪や性暴力の被害者だと気が付かず、年齢を重ねていくうちに気づき、時間が経過してから心理的に大きな影響を受けることが考えられる。幼児期は、自我が芽生え、他者の存在を意識して様々なものに関心を抱く時期である²⁾。研究対象であるI県内の公立A幼稚園では、令和3年度から「生命（いのち）の安全教育」についての保健指導を養護教諭が実施している。しかし、教育効果を高めるために学級担任等の全教諭が取り組むことが必要であることに加え、家庭が個人の性格や考えを形成する影響は大きいことから、性に関する内容を家庭において教えることは必要不可欠である³⁾。

本研究では、幼稚園教諭の性に関する指導についての認識や実施状況、園で取り組んでいる性に関する指導についての保護者の認識および実施の現状について明らかにし、現状から考えられる課題を解決するため、①幼稚園で活用できる教諭用指導資料の作成、②親子で一緒に遊びながら学べる家庭用教材の開発、③開発した家庭用教材を用いた保健指導の内容を検討することを目的とした。

2. 研究方法

I. 教諭用指導資料の作成

(1) 目的

令和5年までの調査から、研究対象であるI県内の公立A幼稚園の教諭全員が園において性に関する指導をすることは必要であると回答し、指導の実施経験者の8割は指導の際に困難さを感じていた。また、指導上の困難点として、参考にする資料が少ないことが挙げられていた。これらの現状の改善に向けて指導案を含む参考資料の作成を行うことを目的とした。

(2) 内容

本資料の内容は、①「生命（いのち）の安全教育」の概要、②各発達段階におけるねらいと指導内容、③集団指導で活用できる指導案（家庭用教材を活用した指導内容）、④性暴力被害の現状とした。

具体的には、指導の見通しがもてるようにすることに加え、いつも振り返ることができる資料となるように設定した。

Ⅱ. 家庭用教材の開発

(1) 目的

家庭における性に関する指導の認識や実施状況について明らかにし、現状の改善に向けて親子で一緒に遊びながら学べる家庭用教材の開発を行うことを目的とした。

(2) 調査方法

公立 A 幼稚園に在籍している幼児 106 名の保護者を対象に、無記名自記式質問調査 (Microsoft forms) を実施した。

調査は無記名で行い、回答は強制ではないこと、内容は研究目的以外には使用せず、個人が特定されることはないことなどを調査説明書にて説明した。回答者の調査票の送信をもって同意を得たと判断した。調査票はメールを用いて配付し、回収を行った。

本研究は、茨城大学教育学部研究倫理委員会より承認を得て実施した。(許可番号：23P1000)

1) 質問紙調査 1

令和 5 年 9 月に、家庭における性に関する指導の認識や実施状況について、質問紙調査を行った。回収数は 86 (回収率 81.1%)、有効回答数 86 (有効回答率 100%) であった。

2) 質問紙調査 2

令和 6 年 8 月に、家庭における性に関する指導の認識と実施状況、動画を利用した学習状況について、質問紙調査を行った。回答数は 58 (回収率 54.7%)、有効回答数 53 (有効回答率 91.4%) であった。

3) 質問紙調査 3

令和 6 年 12 月に、家庭用教材の利用状況や家庭における性に関する指導の認識、幼児のプライベートゾーンに関する理解状況について、質問紙調査を行った。回答数は 21 (回収率 19.8%)、有効回答数 21 (有効回答率 100%) であった。

(3) 結果及び考察

1) 質問紙調査 1

幼稚園で養護教諭や学級担任が性に関する指導を行うことは必要であると考えている保護者は 9 割を超えていた。保護者は家庭で性に関する内容を教える際の教育的支援を必要としていることが報告されている⁴⁾。幼稚園で性に関する指導を行うことは、家庭において性について会話をするきっかけとなりやすいのではないかと考えられる。

家庭での性に関する指導の実施について、57.0% (49 名) の保護者が教えていたが、うち 83.7% (41 名) の保護者は自信がないと感じながら教えていた。保護者世代は学校や家庭において十分に性に関する教育を受けておらず、不安を抱えながら性に関する内容を教えていること⁴⁾が指摘されている。家庭で教えている内容については、幼稚園において指導を行っている「プライベートゾーン」に関する内容が最も多く挙げられていた。その理由として、幼稚園から配付された保健だよりやリーフレットを活用している保護者が多いことが考えられる。保健指導の様子や内容については、保健だよりなどを通じて必ず保護者に知らせていることから、家庭への連絡や情報共有が十分に図れており、そのため家庭で活用できていると考えられる。幼稚園と家庭の連携が上手くなされることにより教育の充実を図ることができる。

性に関することで気になったり、困ったりしていること（自由記述）については、「発達段階や年齢にあった内容が分からない」などが挙げられていた。そのため、保護者のニーズに合わせた、親子で一緒に遊びながら学べる家庭用教材の開発を行うことが必要であると考えられる。

2) 質問紙調査 2

保護者の性に関する認識について、令和5年度より家庭で性に関する内容を教えている家庭は増加し、教えることに自信がないと感じている割合は減少した。また、保護者の性教育に対する自信の有無は、子どもへの対応の仕方に影響している⁴⁾と報告されていることから、保護者の性に関する指導意欲は、一部で向上がみられたと推察される。また、年少児の85.7%（12名）の家庭でプライベートゾーンについて子どもと話をした経験があり、話すきっかけとして「幼稚園から配付された保健だよりを読んだとき」が50.0%（6名）で最も多かった。道園ら⁴⁾は、家庭での性教育の機会は子どもがつくっていると指摘しており、その際保護者はうまく説明できていないと感じていること⁵⁾が報告されている。そのため、園での取り組みは家庭で教えるきっかけとなりやすい可能性が示唆された。

家庭での動画を利用した学習状況については、62.3%（33名）の家庭で動画を利用した経験がみられた。ICT教育の普及などにより、幼児の家庭においても動画を利用した学習形態についての選択が増えている可能性があると考えられる。アニメーションなどの動画の特徴は子どもが興味関心を持ちやすいと保護者は感じていた。そのため、家庭での動画を用いた学習状況を反映させた家庭用教材の内容の検討が必要であると考えられる。

3) 質問紙調査 3

家庭での性に関する指導の実施について、95.2%（20名）の家庭で性に関する内容を教えていたが、80.0%（16名）の保護者は自信がないと感じながら教えていた。

家庭用動画教材については81.0%（17名）が子と一緒に試聴していた。家庭用動画教材をきっかけとして76.2%（16名）の保護者が性に関する内容について子と話をしていた。動画を試聴した全員が家庭での性に関する指導を行う際に家庭用動画教材が役に立ったと回答していた。本教材は家庭での取り組みのきっかけとなっている様子がみられたため、有用であったと考えられる。

子のプライベートゾーンに関する理解状況については、81.0%（17名）が「他の人のプライベートゾーンを見てはいけない」、95.2%（20名）が「触ってはいけない」ことを「知っていて、守れていると思う」と回答していた。また、71.4%（15名）が「自分のプライベートゾーンを見せてはいけない」、76.2%（16名）が「触らせてはいけない」ことを「知っていて、守れていると思う」と回答しており、その割合は減少傾向がみられた。そのため、自分のプライベートゾーンを守るための知識の定着を図るための指導内容や伝え方についての検討が必要であると考えられる。

Ⅲ. 家庭用教材の開発と活用

（1）内容構成

質問紙調査1から得られた結果をもとに、家庭用教材（試聴時間約3分）を作成した。作成した動画教材は①からだは全部大事であるということ、②特に下着で隠れている「パンツの中や胸」と「口」は特別大事であるということ、③特別大事なところをプライベートゾーンということ、④プライベートゾーンは「見たり見せたりしない」ことや「触ったり触らせたりしない」という内容で

構成されている。本動画の特徴は、①プライベートゾーンの説明を「水着で隠れる部分」ではなく、「下着で隠れる部分」としたこと、②楽しく学べるようにクイズ形式にしたことである。

(2) 保健指導

令和6年7月(第1回)と11月(第2回)に全学年に対し、家庭用教材を使用した保健指導を実施した。令和6年7月は家庭用教材と同じ内容で保健指導(第1回)を行い、11月は第1回保健指導の内容に加え、「嫌な気持ちになった時の断り方」についての内容で保健指導を行った。

3. 本研究のまとめ

本研究では、I県内の公立A幼稚園を対象として、「生命(いのち)の安全教育」に関する教諭用指導資料と親子で一緒に遊びながら学べる家庭用教材の開発、保健指導の内容検討を目的とした。

教諭用指導資料については、一つの園を対象としたため、対象数が少なかったことから一般化するには課題がある。そのため、調査の範囲を広げ複数の学校や異なる地域の実態を把握し、効果的な指導資料の内容を検討することが今後の課題である。

家庭用教材については、質問紙調査1では、8割以上の保護者は自身が性に関する内容を教えることに自信がないと感じながら家庭で性に関する内容を教えていること、性に関する内容を教える際に幼稚園から配付されている資料を参考に行っていることが明らかとなった。これらの結果より、親子で一緒に遊びながら学べる家庭用教材の開発の必要性が示唆された。質問紙調査2では、性に関する保健指導の実施や、保健だよりなどで指導の様子や内容を保護者へ周知するなどの園での取り組みは、家庭で性に関する内容を教えるきっかけになりやすいこと、6割以上の家庭で動画を利用した学習を経験していることが示された。これらの結果より、家庭での動画を用いた学習状況(形式や内容)を反映させた家庭用教材の検討が必要であることが示唆された。質問紙調査3では、家庭用動画教材は家庭での取り組みのきっかけとなっている様子がみられたため、本教材は有用であることが示された。しかし、自信がないと感じながら性に関する内容を教えている保護者が多かったことから、詳細な現状と課題の把握に努め、保護者のニーズに合わせた内容をさらに検討することが必要である。なお、本研究の一部は茨城大学教育学部紀要(教育科学)⁶⁾で公表した。

引用文献

- 1) 文部科学省：「「生命(いのち)の安全教育」について」2023. Available at:
https://www.mext.go.jp/content/20221208-mxt_kyousei01-000014005_2.pdf accessed August 16, 2024
- 2) 宇都弘美：幼児期の健康教育-保育所保育士に対する調査より-。鹿児島女子短期大学紀要 42：51-62, 2007
- 3) セーリフ・タティアーナ：日本における性教育の課題～家庭向け図書を中心に～。人間社会環境研究 45, 2023
- 4) 道園亜希, 古田祐子, 佐藤繭子ほか：小学4~6年生の子どもを持つ保護者が家庭で行った就学前後の性教育の実態。福岡県立大学看護学研究紀要 16：63-71, 2019
- 5) 遠藤恵子, 井上京子, 坪井禮子ほか：幼児に対する性教育の実態。山形保健医療研究 10:1-9, 2007
- 6) 鈴木美優, 青柳直子：幼児期における「生命(いのち)の安全教育」に関する保護者の認識。茨城大学教育学部紀要(教育科学) 74：393-400, 2025